

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284029

研究課題名(和文) 公共圏における劇場の役割 ドイツの選択、日本の針路

研究課題名(英文) The role of theaters in the public sphere - A Comparison between Germany and Japan

研究代表者

江藤 光紀 (ETO, Mitsunori)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10348451

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では公演内容・財務・経営・地域性・歴史性などを包括する「劇場圏」という概念を用い、オペラを対象に日独比較を試みた。全土に80以上のレパートリー劇場があるドイツと、未だに貸館中心のホールが多い日本とは状況が大きく異なるが、劇場をコミュニティとの関連で捕らえることで、そこに様々な共通性があることが分かってきた。劇場がより意義のある文化施設になるには地域コミュニティとの密接な関係が欠かせず、よい劇場は必ず地域の文化的シンボルとして機能している。ドイツの中小の劇場の調査を通じて明らかになったこの特性は、日本の地域の文化創造においても、指針となりうるだろう。

研究成果の概要(英文)：In this research, we tried to compare opera theaters in Germany and Japan based on the concept of "theatrical sphere" which comprehensively describes performances, financial management, regionality, history, etc. The situation greatly differs from Germany, in which there are more than 80 repertory theaters throughout the country, and Japan, in which many halls still remain as rental one. However, we can find many affinities between them by understanding theaters in relation to communities. A close relationship with the local community is essential for theaters to become a more meaningful cultural facility. Good theaters are recognized as a cultural symbol of the region without fail. This characteristic which our research found out about small and medium theaters in Germany will be a guide to revitalize regional culture in Japan as well.

研究分野：芸術学

キーワード：劇場 コミュニティ オペラ

1. 研究開始当初の背景

まずは本研究の前身となる基盤研究(C)「歌劇場の分析を通してみるドイツの文化・公共政策」(平成22~24年度)の成果をまとめ、本研究についての視点を改めて確認し明確化するところからスタートした(第30回日本ドイツ学会(共同発表「オペラの危機を読み解くために」, 2014年6月、江古田・武蔵大学、同名論文「ドイツ研究」第49号)。

2. 研究の目的

今回の研究では上演システム、自治体の助成金の流れや立地の歴史性を総合的に捕らえるという前回の研究の方法論を維持しつつ、劇場内での動きだけでなく、それぞれの地域の文化を劇場がどのように表象しているのかという点にまで踏み込んで分析することを目的とした。

3. 研究の方法

2の内容を解明するために、劇場の活動を面的に捕らえる「劇場圏」という概念を仮説的に設定し、地域の愛好家、政治動向、近隣の劇場や文化圏から絶えず影響を受け運営されていく劇場のダイナミックな活動を全体として把握するように努めた。またドイツの劇場は、オペラ(音楽劇)、演劇、バレエ・ダンスの3部門制を敷いているところが多いが、比較を容易にするために、今回もまた本チームのメンバーで判断が可能で、公演に最も総合的な要素の絡むオペラを対象を限定した。

アプローチ方法や調査対象は以下の通りである。

(1) 方法論

「劇場圏」という概念を用いるに際して、それをより具体化するために、以下のアドヴァイスを受ける機会を設けた。

音楽の歴史をエモーションから分析する感情史のアプローチをとるマックス・プランク研究所のOliver Müller氏、ロンドン、パリ、ベルリンといった大都市の劇場の比較を多角的に行っているSara Zalfen氏の協力を仰ぎ、Müller氏を東京に招聘してシンポジウムを開催する(2015年3月)とともに、Zalfen氏からは劇場調査についての実践的な情報提供を受けた。

また地域自治体と文化行政との関連を探るために、政大学大学院まちづくり都市政策セミナーに参加発表し、その方面の専門家や実務家からもアドヴァイスを受けた(2015年10月)。

(2) 国内調査対象

「オペラの都市」を掲げる広島の実況について広島オペラ・音楽推進委員会の取り組みを調査した。アステールプラザが自主制作するオペラのみならず、2016年には「広島オペラ・マラソン」に参加している全ての市民オペラ団体を調査した。

(3) ドイツにおける調査対象

以下のような劇場を調査し、統計、公開資料からはわからない公演の雰囲気や関係者の取組への意識などを探るとともに、運営の実態や現場の声を収集した。

2014年度: ニュルンベルク州立劇場、フライブルク劇場、マンハイム国民劇場

2015年度: ドレスデン・ゼンパー・オペラ

2016年度: マインツ州立劇場、ハイデルベルク劇場

また今回はドイツ・オーケストラ協会、ドレスデン学術・芸術省の担当部署(2015年度)、ラインラントプファルツ州文化省、ハイデルベルク市役所文化局(2016年度)など劇場側のみならず行政の側の関連部署も訪問すると共に、常設の劇場の運営形態とは異なる音楽祭などについても適宜調査した。

4. 研究成果

オペラの運営形態にはレパートリー制とスタジオオーネ制の違いや、劇場が主体となって制作するものと制作集団(カンパニー)を基盤とするものの違いがあり、日本には一定の演目をレパートリーとして通年で公演を行う劇場は新国立劇場しかないで、ドイツと日本の国際比較は一見すると成り立たないように見える。しかし両者を運営形態ではなくコミュニティをシンボライズするものとしての劇場やオペラ活動、その活動域としての劇場圏という視点からみると、日本のオペラ上演が、地域社会との関わりの点で次のような特性を持っていることが分かってきた。

オペラは音楽や演劇、舞踊など複数の芸術を包摂する総合芸術で、最も多様な人々が制作にかかわる舞台芸術である。日本全土では毎年1000公演以上のオペラが上演されており、公演箇所も日本全土に広がっている。これらの活動を支えているのは、プロの音楽家を核としアマチュアが多数参加する自主団体、いわゆる市民オペラ団体である。オペラの上演には、予算やスケジュールの管理にはじまり、膨大な作業が必要だが、これらの団体はノウハウを経験的に持ち、極めて低コストで上演を実現する。それを可能にしているのは地域の人的紐帯、いわば主宰者たちの人脈である。ヨーロッパ文化圏で生まれたオペラがこれほどまでに広がっていることは日本における市民社会の成熟を物語るものと言えるだろう。したがってオペラ・コミュニティは人的紐帯の結節点の一つとして見ることができる。

もちろんその一方で文化水準の向上にはプロフェッショナルな団体・劇場による高い芸術性を備えた上演は欠かせない。その水準も大都市圏を中心として、徐々に上がりつつある。この二つの動きは背反するのではなく、バランスを取り相互に刺激しあうものでな

ければならない。

また劇場・カンパニー間の共同制作によるコスト削減、アウトリーチ活動やこどもオペラなど現場レベルでの工夫は、すでに相当に海外の事例に学び実践され、アートマネジメントの技術も体系化されつつある。これらの点で、日本のオペラ上演は劇場をベースとしたドイツのケースとは異なるが、一定の発展を遂げていると言える。

しかしドイツには劇場文化が社会インフラの一部として公的制度の中にしっかり組み込まれているのに対し、日本の文化政策は場当たりの見えるケースが多い。それはそれを支えるべき理念や理論が十分に議論されていないからではないだろうか。コミュニティ振興のための芸術・文化の活用は今やブームとなった感があるが、一方で地方財政の逼迫、そして劇場においては指定管理者制度や劇場法などの矛盾や限界から混乱も見える。そうした意味でも我々が提唱する劇場圏という概念は、公演の質・制作体制から行政・財務、地域性・歴史性をも加味したもので、劇場と地域の結びつきを明らかにするだけでなく、なぜ文化が地域に必要なのかを説明するモデルとしても用いることができる。

この三年間の研究成果を広く世に問うために、研究会においては昨年夏前から編著作の出版計画を練り、秋より出版社との交渉を行ってきた。これまでの調査に基づきドイツに中・小規模の劇場の運営実態をその地域性などから解き明かすとともに、国内の比較事例として「オペラの町」を掲げる広島県の状況を扱う。またそれらを理論的に分析する視座を提供するとともに、世界のオペラ界の動向や市民オペラがさかんな日本の特徴など、幅広い視点から論じる予定である。現在、編集者との内容面を含めた打ち合わせが終了し、2018年中の刊行を目指して各人が鋭意、執筆に取り組んでいるところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 辻英史・城多努・江藤光紀・石田麻子「オペラの危機を読み解くために」『ドイツ研究』49号、2015、p91 - 110。

〔学会発表〕(計11件)

1. 江藤光紀「ドイツの劇場運営 美学的・運営上の観点から」第40回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー、2015年10月24日、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)

2. 城多努「ドイツの劇場と財政・財務」第40回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー、2015年10月24日、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)

3. 辻英史「ドイツの劇場文化と「劇場圏」」第40回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー、2015年10月24日、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)

4. 城多努「公共劇場と劇場圏」日本地方自治研究学会第32回全国大会2015年09月20日
沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市)

5. 江藤光紀「ニュルンベルク劇場の現在」ワークショップ「日本のオペラ上演の現状と問題点」、2015年06月18日、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)

6. 城多努「日本とドイツにおけるオペラの財政問題」ワークショップ「日本のオペラ上演の現状と問題点」、2015年06月18日、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)

7. 辻英史「フライブルク劇場の現状」ワークショップ「日本のオペラ上演の現状と問題点」、2015年06月18日、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)

8. Hidetaka Tsuji, Vorstellung des Forschungsprojektes „Oper und die Oeffentlichkeit“
国際ワークショップ
JSPS Forschungsprojekt "Oper und die Oeffentlichkeit"、2015年03月02日、法政大学(東京都千代田区)

9. Mitsunori Eto, Die Operlandschaft im Japan von heute
国際ワークショップ
JSPS Forschungsprojekt "Oper und die Oeffentlichkeit"、2015年03月02日、法政大学(東京都千代田区)

10. Tsutomu Kita, Das Finanzwesen des Theaters in Deutschland und Japan (in English)
国際ワークショップ
JSPS Forschungsprojekt "Oper und die Oeffentlichkeit"、2015年03月02日、法政大学(東京都千代田区)

11. 辻英史・城多努・江藤光紀・石田麻子「オペラの危機を読み解くために」第30回日本ドイツ学会総会・シンポジウム、2014年06月07日、武蔵大学江古田キャンパス(東京都練馬区)

〔図書〕(計1件)

1. 江藤光紀
「総統の劇場 ナチ期のザールブリュッケンとその劇場」、『帝国と文化』(江藤秀一編)

春風社、2016、p126-143。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

江藤光紀 (ETO, Mitsunori)
(筑波大学人文社会系・准教授)
研究者番号：10348451

(2)研究分担者

城多努 (KITA, Tsutomu)
(広島市立大学国際学部准教授)
研究者番号：30423966

辻英史 (TSUJI, Hidetaka)
(法政大学人間環境学部教授)
研究者番号：80422369